鹿児島県立与論高等学校
校長通信
第14号（令和7年7月30日／校長 大倉秀心）

校訓「好学 創造 親和 不屈」
鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地１
電話（0997）97-2064
FAX（0997）97-2844

戦後80年に思うこと

１学期の終業式で私は，「今年は戦後80年の節目の年。8月15日の終戦記念日を迎えるにあたり，戦争に関するテレビ等の特別番組も増えると思う。今年の夏休みは通常の学習や部活動，探究活動に加えて，戦争について読む・見る・考える・感じる・行動する夏休みにしてほしい」と話しました。

どうしてこのようなお願いをしたかというと，80年前に日本及び世界で起こっていたことを知り，一つ一つの事象を掘り起こしていくことで，その当時の人々がどんな思いで生きていたのかを「想像」することなしに過去，そしてそこから地続きにつながっている現在を正しく理解することはできないと思うからです。

長年学校で教師をしていて，近年強く感じるのが，生徒の「想像力」の欠如です。自分の言動が相手や周りの人たちにどのような影響を与える可能性があるかを全く想像もせず，自分本位の言動をする。その結果，相手を傷つけたり不快にさせたりする。これが人間関係のこじれを生み，学校ではいじめ問題に発展する。全国どのような地域においてもこのような事例は近年，珍しくなくなりました。だからこそ，皆さんには理解するのに莫大な「想像力」が必要となる戦争という事象から目を背けてもらいたくないのです。私には戦争とは国同士のいじめの応酬と思えなくもないのです。

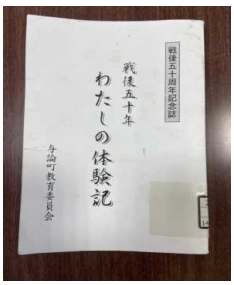
「想像力」は心のブレーキ

戦後80年ということは，皆さんの祖父母世代の方も戦争を経験していないか，していてもはっきりとした記憶がある人は少ないのではないでしょうか。

20歳前後で学徒出陣により戦地に赴いた大学生たちもご存命なら今100歳前後ということになると，実際に戦争を体験した方々の生の声を聞くことができるのは長くてあと10年でしょう。このような方々の記憶をできるだけ正確に残し，次の世代に伝えていくことが，今を生きる我々の務めなのかもしれません。

現在100歳前後の方といえば，皆さんにとっては曾祖父母（ひいじいちゃん・ひいばあちゃん）世代といえるでしょうか。その方々が戦時中，どんな経験をしたか気になりませんか。

先日，本校の図書室で興味深い一冊を見つけました。『戦後五十年　わたしの体験記』という小冊子です。与論島出身の15人の方々が戦争体験を寄稿されています。この本の中で印象に残った，あるいは衝撃を受けた箇所を紙面の都合上，一部ですが抜粋したいと思います。皆さんも想像力を働かせてイメージしてみてください。



「いよいよ戦況が悪化し敵の上陸が予想されると駐屯部隊長から指示があり，敵が上陸した場合は与論島は全員叶の梶引半田の西下に集結し全員玉砕する旨示達された。」

「...威嚇射撃に対し，小野防衛隊長が一発の反撃の発砲も許さなかった厳命のおかげだったと信じています。敵機は超低空をし，撃墜しようと思えば簡単にできました。血気にはやり，発砲しようする者もいたが，島民の命を預かる小野隊長は，発砲すれば，ここに兵隊がおることがばれ，総攻撃をかけてくるに違いない，そうすれば与論島はひとたまりもないという判断の下だった。あの英断がなければ全滅していたでしょう。」

「たしか四機だったと記憶しているが黒い色をした飛行機が西の空を北へ向かっていました。その中の一機が群れを離れて東に向きを変えた。那間の上空あたりで今度はこっちに向きを変え，黒煙を吐きながら突っ込んでくるではありませんか。びっくりしてその場を逃げようかと思ったとたんでした，「ババババババーン」，驚くも驚かないも未だ一メートルも掘っていない防空壕へ一目散に走り込んだのでした。これが世にいう昭和十九年十月十日の沖縄与論を襲ったはじめての空襲でありました。」

「昭和二十年三月一日，昼，どんより曇った日だった。空襲警報発令後，間もなく地響きするような爆音が大きくなった。と思うと，無数の海鳥が島の上空を舞うように，黒い戦闘機が空一面を覆ってしまった。私たちは，天地をゆるがす爆音に，目や耳を思いきり押さえてうつ伏せになった。

それこそ万雷の如く耳をつんざき，与論島を震撼させ

た。一時間余りも旋回しただろうか。我らは身も魂も徹底して打ち抜かれ，ぬけがらのように，ただぼう然として言葉を失った。」

「三月二十三日，平時なら茶花校は卒業式だろうに。その校舎をねらって魔物のような，四機のグラマンが次々低空して焼夷弾を投下。私達がやった擬装も何の効なく，黒煙や烈火の餌食となる。続いて商店街や集落一帯を襲い，先祖代々築きあげた家屋が何の造作なく煙と化す。私たちは自分の生き物を見殺しにするように胸を締め付けられた。那間校も同日焼失されたのこと。

以後，毎日のように空襲。要所を挙げると，同月二十六日午後，与論青年学校，与論校及びその西部と城集落の大半焼失。四月四日には，琴平神社をはじめ，その北部一帯を炎焼。」

「...男性といえばただ軍人になれるのが誇りとされ，愛国心に満ちた時代であった。

でもそれは，戦地に行きその戦争の恐ろしさ，悲惨さを知らないものの心境であった。時に大東亜戦争の末期沖縄戦。昭和二十年三月，米軍が沖縄に上陸を開始して以来与論島も島を揺るがすような砲弾の炸裂音，すさまじい爆発音と真っ赤に染まった沖縄本島の上空を見たとき，これが本当の戦いだとの実感であった。」

「供利沖から茶花の沖合まで，毎日のように停泊している軍艦，日本の軍艦とばかり思い込んで，まだ日本は大丈夫だ，軍艦が待機しているとばかり思い込んでいる矢先に一隻の巡洋艦が江ヶ島の港まではいり込んで来て艦砲射撃をはじめた。最初はドラム缶を叩く音のようだったが，艦砲だと分かって身震いすることでした。

艦砲射撃で一人が犠牲になった。それからは，空襲だけでなく軍艦が待機している間は日中出歩くことに注意を払った。」

「老人も口に合った食事をあげられず，ほんとに気の毒でした。私の祖母は八十四歳，隣のばあさんも八十を越えて二人とも壕の中でこの世を去った。葬儀もできず，夜家族だけで葬儀をすませ墓まで暗やみの中をやっとのことで葬った。」

「日本の特攻隊が，沖縄まで辿り着けずに与論の上空で撃墜されて落ちた。特攻隊員は，洋服や落下傘に火が付き燃えながら，一人は私の家の後方二百メートルの畑に落ちた。色白で，紅顔可憐な美少年だった。遺体は寺崎墓に埋葬された。」（『戦後五十年　わたしの体験記』与論町教育委員会）

皆さんの曾祖父母世代以上の方々が経験した戦時中のリアルな与論島の様子が手に取るように分かります。図書室に返却しておきますので，是非じっくりと読んでみてください。

私は今，与論の美しい自然や景色を眺めながらウォーキングすることが日課になっていますが，与論の広く青く美しい空が戦闘機で覆われていたり，晴れた日には手に取るように見える沖縄の上空が真っ赤に染まっているようなことを想像すると恐ろしくてゾッとします。やはり戦争だけはしてはいけないと改めて強く感じる次第です。想像力を正しく使うことは，人を誤った道に行かせないブレーキの役割を果たすのかもしれません。

先人からの命のバトン

皆さんにはそれぞれ8人の曾祖父母がいます。人の死が今とは比較にならないほど身近にあった戦時中に，もしその8人のうち一人でも命を落としていたら，今皆さんは存在していないことになります。曾祖父母が奇跡的に戦時下を生き抜いてくれたからこそ祖父母が生まれ，両親が生まれ，そして皆さんが生まれたのです。

そう考えると，今皆さんが生きていることは当たり前のことではない。奇跡の集合体が皆さんの生命を作っていることが分かります。だからこそ人の命は尊いのです。その命を奪い合う行為に正当な理由など存在するはずがないことは皆さんも容易に理解できるでしょう。

それでもなお，世界から戦争がなくなることはありません。ウクライナとロシア，パレスチナとイスラエルだけでなく，小さな紛争は世界各地で起きています。先日はタイとカンボジアの間で武力衝突が起こりました。日本を取り巻く環境も，周辺国家の動き次第では決して平穏な状態と言い切れるわけではありません。だからこそ想像力を働かせて，いかに戦争を防ぐか，武力衝突を避けるかを考えなければならないのです。これは誰かの役割ではなく，国民ひとりひとりの役割なのだということを近々選挙権を持つことになる（あるいはもう既に持っている）皆さんには自覚してほしいと思います。

戦時中，大学等の高等教育機関への進学率は3%程度だったといいます。国の将来を担うエリートとして，学問を究めることを期待されていた優秀な大学生たちが学徒出陣で徴兵に取られ，命を落としたのです。

「もし戦争が起こらず，彼らが若くして命を落とすことがなかったら，どんな世の中を作っていたのだろうか」と想像することがあります。今とは違う，もっと素晴らしい日本になっていたかもしれません。

戦争で亡くなっていった彼らに対して，また命のバトンを奇跡的に繋いでくれた先人に対して恥ずかしくない生き方をすることが我々の責務だと思います。戦争について様々なことを知り，「想像力」を働かせて考えること。それが第一歩なのです。